



地域の底力

山梨県北杜市の未来への活力は 自然の恵みとよみがえる農地

美しい景観、水資源、太陽の力。
日本一の「山紫水明」が、
北杜市の農地と人々の暮らしに
新たな息吹をもたらす。



上／耕作放棄地を区画整理し、農業法人に貸し出すことで農地をよみがえらせた北杜市の景色。背景を彩るのは、長野県との境に広がる八ヶ岳。下／日本名水百選に選ばれた、南アルプス山脈と甲斐駒ヶ岳に端を発する尾白川の清流。

取材・文山内史子
写真野瀬勝一

北杜市の宝ものは 日本一の山紫水明

山梨県北杜市は、県最北端に位置する人口約四万八〇〇〇人の自治体だ。二〇〇四年に明野村、須玉町、高根町、長坂町、大泉村、白州町、武川村の七町村が合併し、さらにはその二年後に小淵沢町と合併して現在に至る。

首都圏からは中央自動車道や中央本線を利用すれば二時間ほど、日帰りで往復できる距離にありな

がら、八ヶ岳や南アルプスの甲斐駒ヶ岳、茅ヶ岳などの山々が周囲をとりまく美しい眺めは圧巻。その豊かな自然が生む北杜市のかげがえのない宝は、「山紫水明」だと話してくれたのは、一二年にわたる市政に取り組んできた前市長の白倉政司氏だ（取材時は退任前）。

「北杜市は『山紫水明』が日本一なんです。『山』は文字通り、山岳景観。日本の百名山のうち、八ヶ岳をはじめ八つの山が望めます。『紫』は国蝶に選定された、オオムラサキのことです」

オオムラサキの名は、雄の羽が紫色に輝くことに由来する。その

華麗な姿は国内各地で見られるが、なかでも旧長坂町は日本一の生息地として知られる。

「山紫水明の『水』は、日本のミネラルウォーターの三分の一以上を北杜市が産出しています」



上／尾白川渓谷にかかる吊り橋を渡って進むルートは、人気のトレッキングコース。下／日照時間日本一という自然の恵みを最大限活用する「北杜サイト太陽光発電所」。

北杜市は、日本百名水が三カ所選定されている全国で唯一の自治体でもある。その名水やミネラルウォーターと源が同じ伏流水を、

市民がごく当たり前に生活用水として使える暮らしは羨ましい限りだ。

「『明』は日照時間が日本一なんです。県会議員の時代からエネルギーチェンジの必要性を訴えていたこともあり、北杜市市長になったのをきっかけに、太陽光発電に関する世界初の国の研究所誘致に取り組みました」

クリーンエネルギー施設の導入は積極的に行われ、市営の太陽光発電所に加え小水力発電所も設けられた。

「今、日本の若者の価値観が确实



7町村が合併した2004年から市政を担ってきた北杜市前市長の白倉政司氏は、「北杜市の人は何事にも一生懸命なんです」と市民の生真面目な気質を語る。

「転居の際、こんなに美しいところに住んでいいのかと思いました」と話す、北杜市企画部長濱井和博氏。左は「世界に誇る水の山」プロジェクトのポスター。



に自然志向へと変わってきているなか、北杜市の『山紫水明日本一』は、大きな意味があると思っています。他との差別化として私たちが掲げる看板は、『一流の田舎まち北杜市』。住んでいる人が誇りを持ち、都会の人の足や心が北杜市に向かうようなまちづくりを目指してきました」

耕作放棄地が企業誘致のてこに

白倉氏の言葉どおり、実際に今、北杜市には全国から熱いまなざしが注がれている。それは、耕作放棄

棄地の有効利用に関する動きだ。山梨県は、耕作放棄地率が全国第二位。北杜市でも荒廃農地が増大していたが、状況は好転しつつある。その経緯を、北杜市企画部長の濱井和博氏に伺った。

「かつては養蚕業が盛んな地域でしたが、昭和三十年代に衰退しはじめ、併せて農業従事者の高齢化により荒廃農地が増加しました。そこで、一九九〇年から問題解消の検討が本格化し、区画整理を含めた農地の再編や換地が行われました。そして一九九六年に、農地を預かる農業振興公社が設立されたんです」

公益財団法人である北杜市農業振興公社とは、行政サイドが遊休農地をまとめて預かり、農業法人を誘致する調整役を担う組織だ。たとえ耕作放棄地の権利者が一〇〇人いても、農業法人は市・農業振興公社・県と交渉するだけで済む上、貸す側も借りる側も双方ともに、行政が関わっているということなどで安心感が生まれる効果もある。

「その後、紆余曲折を経た二〇〇九年、勝沼のミサワワイナリーさ

らが北杜の土地がすばらしいと評価してくださり、ぶどうの栽培を始めたんです。さらにはスプラウト（新芽野菜）の栽培で知られる広島の上農園さんが参入したことで、北杜市での農業法人の農地利用にギアが入りました」

白倉前市長も挙げていた北杜市の日照時間の長さは、雨が少ないことを意味する。すなわち農業に適していないというのが定説だったがゆえに、かつては養蚕に特化していた。ところが、野菜や果物の場合はたっぷり陽を浴びることで、採れ高が増えることがわかってきた。その他豊富な水、昼夜の

尾白川近くの一九七〇年創業の「山梨銘醸」は、初代が水の良さに魅せられてこの地で酒造りを始めた。



寒暖の差など、農業における北杜市の優位点は少しずつ世間に広まり、現在までに一七社が参入を決めている。

農水省からの出向で二年前にこの地に転勤し、全国の事情にも詳しい濱井氏はこうも話す。

「耕作放棄地の解消対策は全国的に行われており、土地改良事業まではなんとか進んでも、農業法人を連れてくることまではなかなか至らないんです。北杜市のケー



のどかな田園風景を南アルプス山脈が彩る「水車の里公園」。



アグリマインド代表取締役会長の藤巻眞史氏は、「北杜市農業企業コンソーシアム」の会長でもあり、「北の杜フードバレー」のプロジェクトを推進している。

「スはかなりめずらしい」

「進んでいる理由として、濱井氏は市の対応の早さを挙げる。」

「ものごとくにじっくり取り組む深みがある一方、企業参入については、平均で二年もあれば話が進むスピード感があるんです。たとえば国でこんな制度があるとわかれば、『よし明日行くぞ』となる、ここぞという時の勢いもすごい。必要であれば、議論する前にもう動いている。まさに武田軍の風林火山そのものです」

「首都圏から二時間、という距離もメリットのひとつだ。」

「観光の分野では、これくらいの近さを『神距離』『神時間』と言

うそうですが、朝採れのレタスを、

二時間後には首都圏で食べてもらうことが、将来的に北杜ならでき

るのではないかと思っています」

実は中京圏からも、三時間ほどの距離。今後は太平洋と日本海を結ぶ中部横断自動車道も開通し、北杜市で中央自動車道とクロスする予定だという。現在三カ所あるインターチェンジも増える未来、北杜市には流通のハブとしての期待が高まっている。

未来を担う フードバレー構想

実際に北杜市に参入した農業法人の一つであるアグリマインド代表取締役会長の藤巻眞史氏にも経緯を伺った。トマトジュース等で知られる食品メーカーのカゴメとの技術、販売提携のもと、二〇一四年からトマトの栽培を行っている。

「日照時間が長い、気温差があるなど、北杜市は実は日本一トマト作りに適している地なんです。しかも栽培のための広大な土地があるということでも市に相談したので



ですが、計画から造成まで、二年かかりませんでした。市に農業企業誘致のプロジェクトチームがあり、土地や技術、補助金関係などそれぞれのスタッフが対応した上、候補地の提案から地権者である農家との交渉まで、すべて進めてくれました」

アグリマインドのトマトはオランダの最先端技術を取り入れた養液栽培（注で、ハウスの面積は約二ヘクタール。先が見通せないほどの規模に圧倒される。ガラス張りの屋根を彩るのは、まぶしい青空。日照時間がパーセント長ければ、トマトの収穫量も同じ割合で増えるという。

収穫量だけではなく、おいしさ



アグリマインドのガラスハウスは、アジアでは初のオランダKUBO社製。害虫が侵入しにくい構造であることに加え、入室に関して食品工場レベルの徹底した衛生管理を行い、減農薬での栽培が可能になっている。

もまた違う。真っ赤に熟したトマトは菌ごたえがあり濃厚な味わい。甘みと酸味のバランスが良く、いくらでも手が伸びる。ちなみに、抗酸化作用のあるリコピンの含有量も高いそう。

現在、このアグリマインドをはじめ北杜市に参入した企業がコンソーシアム（企業連合）を立ち上げ、農業の六次産業化や物流の効率化などについて共同で取り組む事業が進んでいるのも興味深い。

（注）土を使わずに、肥料を水に溶かした液（培養液）によって作物を栽培する栽培法。



「コンソーシアム全体で今、約五〇〇人の雇用を生んでいるんです。北杜市内だけでは人員が足りずに近隣から通っている人もいます。ただ、働き手のメインは団塊の世代。将来的にもっと若い人たちにも働いてもらうため、きちんと利益が出る農業を目指したい。さらには飲食店から医療関係まで、北杜には魅力的な施設がそろっている、というまちづくりを考えています。最終的にはきちんとオーラル北杜で、食や農業を核としたファードバレーを作ろうと。それが次第に山梨県全体に広まっていけばいいなというのが、将来の夢ですね」

農村が都市と連携するモデルケース

アグリマインドをはじめ大手企業の参入同様、全国から注目されているのは、ごく早い時期から耕作放棄地を資源とみなし、こつこつと地道な活動を積み重ねてきたNPO法人「えがおつなげて」の

代表理事を務める曾根原久司氏だ。曾根原氏はもともと東京で経営コンサルティングを営んでいたが、一九九五年に旧白州町に移住してきた。

「耕作放棄地が多い中、なにか新しい価値やニーズが結びつけば事業になるという発想からでした」

当初、経営コンサルティングとしての拠点は東京に残しつつ一〇〇坪の自給農園を耕すことからスタート。その後、数年かけて開墾

地を二ヘクタールに広げていく。この期間は、知識や技術を習得する学びの時期であったと同時に、NPO法人の立ち上げを見据えた準備期間でもあった。

「農村の資源を生かすには都市との連携や共存が必須だと思っていましたので、都会の人も田舎の人も関心があれば誰でも参加できる異業種交流会を定期的に開いてい

たんです」
そして二〇〇一年、NPO法人

NPO法人「えがおつなげて」の代表理事を務める曾根原久司氏の活動については、『日本の田舎は宝の山―農村起業のすすめ』（日本経済新聞出版社）ほか著書も一読を。



信玄餅で知られる北杜市の老舗菓子店、一九〇二年創業の「金精軒」では、「えがおつなげて」と提携協定を結び、二〇一二年から社員が自らの地の大豆として知られる青大豆栽培を手がける。



神奈川県農業生産法人グランパファームと地元地権者が出資した「ドームファーム北杜」では、40棟のドーム型のハウスでレタスの水耕栽培が行われている。

「えがおつなげて」を設立。その活動が脚光を浴びるようになったのは旧須玉町内の限界集落、増富地区の復活劇だった。役場から相談を受けて曾根原さんが提案したのは、都会に住みながらも農業に関心を持つ若者たちのニーズに応える「開墾ボランティア」の募集だ。しかしながら、最初からスムーズにいったわけではない。

「耕作放棄地の開墾に、都会から若者が来ます。



デザイナーの鈴木真穂子氏は、2007年に「NAVY.WO」を設立。2016～17年秋冬は、春を待つ冬山のエネルギーをテーマにした新作「♡AND MOUNTAINS」を発表した。

この地区は交流の拠点になります。そう話したら皆さんがぼかんとした表情になって、こんな限界集落に人が来るわけないだろうと言われました」

地域住民への説明会を何度も行い、ようやく曾根原さんのプランの承諾が得られたのは半年後のことだ。

「開墾ボランティアには、最初の三年間だけでも一〇〇〇人ほどが参加。入れ替わり立ち替わり誰かが来て、耕作放棄地がみるみるよみがえってくる。それだけではなく、若者たちがお年寄りと話をしてたり一緒に酒を飲んだりといった密な交流が生まれてきました」

開墾ボランティアは増富地区の人の心をも耕し、元気をもたらしにくれたのだ。

その後も、耕作放棄地を利用し、首都圏の企業と連携して社員の人材育成や顧客サービスのための農業体験プログラムを実施する「企業ファーム」の仕組みを構築。農地は次々と息を吹き返し、一方で都会から訪れた人々は豊かな自然のなかでの農作業によって心のエネルギーを得る相互作用が生まれた。農業を媒介として、まさしく笑顔が広がっている状況だ。

都市と農村との交流により地域や農業を活性化させる「えがおつなげて」のモデルケースは全国的に広まり、曾根原氏が考案した農村起業家育成プログラムは、三重県庁や北海道庁の研修にも採用されている。曾根原氏は山梨県立農業大学校で新規就農希望者のためのコースで講師を担当しているが、この一二年の間に三〇〇人ほどが実際に就農したとの話も、印象深く胸に刻まれた。希望の光。農業に興味をもっている若者は、決して少なくない。

東京にはない 自然の活力を得る暮らし

最後にお話を伺ったのは、全国で計五店舗を展開するレディースファッションブランド「NAVY.WO」の創業者であり、自らデザイナーを務める鈴木真穂子氏だ。アトリエ兼直営店からほど近い世田谷区在住だったが、現在はそこの住まいはそのままに生活の本拠地を北杜市に移し、ともにブランドを立ち上げたご主人と北杜市―東京間を行き来。鈴木氏のよ



名水百選のひとつ「八ヶ岳南麓高原湧水群」に含まれる、川俣川溪谷の吐竜の滝。

うな二地域居住者は最近、北杜市で少しずつ増加しているという。

「子どもがぜんそくをもっていたため、空気のいいところで過ごさせたいとずっと思っていて。三歳になったときに思い切って市に情報求めて、一軒家を借りました。それまで北杜市とはとくに縁はなかったのですが、山並みが素晴らしいので通るたびにいい場所だなあとはいっていたんです」

当初は休日に北杜市で過ごすことが多かったが、現在は状況が逆転し、忙しい時期を除いては、週二回ほど東京に行く生活。お子さんも北杜市の保育園に通っている。「住んでみても、子どものぜんそくが出なくなりました。日々変わる景色も、何事にも替え難いな



川俣川溪谷にかかる、長さ90メートルの東沢大橋。



南アルプス山脈と復活した耕作放棄地。自然に恵まれた市内の景色は四季折々、趣きを変えながら生活を彩る。

と思っています。水も野菜もおいしいので、野菜をただ切って食べるというシンプルな食事にいつも感動しています」

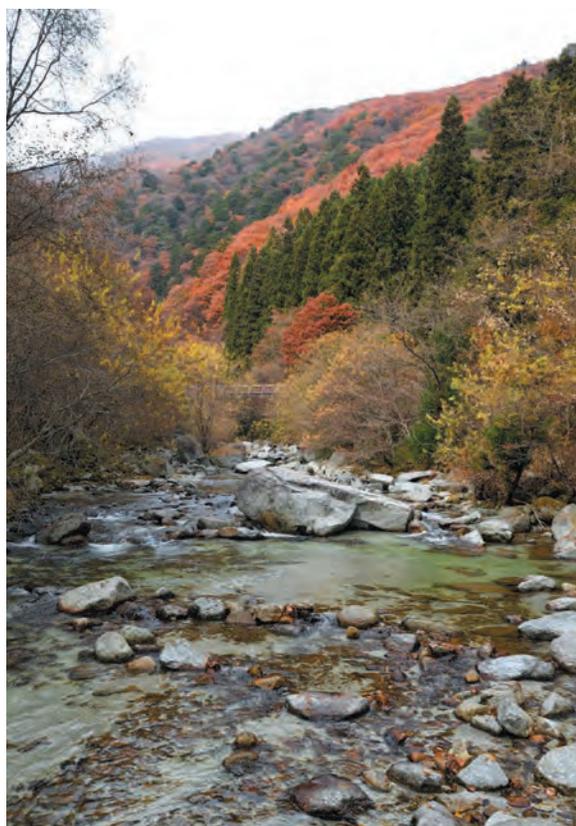
プライベートだけではなく、ビジネスの面でも多くの変化があったという。

「対照的なことは、夜が遅くなっても街が明るい東京とは異なり、

こちらでは六時を過ぎると真っ暗になります。北杜市の星空は、とてもきれいですし、自然に身体をオフへと切り替えてくれる環境があるんです。また、東京では仕事の事を考えすぎたりでなかなか寝付けないこともありましたが、こちらでは夜、緑の香りで気がふつと抜ける。そういう神経が休まる時間がとても大事だと思うようになりました。仕事に対する集中力が出てきましたし、今までは違う角度からの発想のエネルギーも感じます」

ファッション業界では最近、きれいな景色の中でサービスを提供するということをテーマとした提案が注目されているが、鈴木氏もまた、新たなことを手がけられないかと思案しているそうだ。

「便利な東京では、たとえば電車は何本も来るし、いつでもどこでもご飯が食べられる。毎日漫然としていてもなんとなく生きていく。でも、子どもや未来を育てていくためには、大人がきちんといろいろなことを考えなければなりません。ここにはそのための活力を満たす、何かがあると思うんで



尾白川の川底は砂地ではなく花こう岩でできているために清らかな流れが保たれ、晴れた日には緑色にきらめく。

人が生きていくための 原点が北杜市にはある

雲や山並みなど、北杜市の景色を織り込んだやさしいデザインを生地を拝見しながら、白倉前市長のお話が胸をよぎった。

「人類には、四つの赤信号があります。食料、環境、資源エネルギー、そして水。生きていくための原点であるそのすべてが、北杜市の潜在力であり能力。だからこそ、これから注目されると思います」

市では二〇一四年に「安全・安心 日本の台所」という宣言を行

す。この場所をサービスとして提供して、何かできないかなと」

い、農業に根ざした市政と市民生活のスタンスをより明確にした。また、同年に登録された「南アルプスユネスコエコパーク」に北杜市の甲斐駒ヶ岳や白州・尾白川おしろがわなどが含まれたことをきっかけに、これまでも増して水資源の保全活動に力を注ぐ「世界に誇る『水の山』」プロジェクトが立ち上がっている。

「財政健全化など、実現しなくてはならない課題はたくさんあります。でも北杜市には、夢もまたたくさんあるんです」

白倉氏が語った「生きていく原点」である「山紫水明」の宝と夢は、これからも北杜市の人々に受け継がれてゆくだろう。